



Title	》 シラーに於ける近代詩人としての自己意識 《 (2)
Author(s)	水野, 光二
Citation	明治大学教養論集, 130: 33-48
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12149">http://hdl.handle.net/10291/12149</a>
Rights	
Issue Date	1980-02-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## 》シラーに於ける近代詩人としての 自己意識《（2）

水野光二

ところで、最初に触れたように、シラーがワイマールに来たばかりの頃はゲーテはまだイタリア旅行中だった。ゲーテにとってこの旅行が詩人として、人間として決定的な転機をもたらすものとなったことは周知のところである。そのゲーテに、ワイマールに来てからほぼ1年経って、シラーは偶然ルードルシュタットのレンゲフェルト家のもとで逢い、言葉を交わす機会に恵まれる<sup>(1)</sup>。1788年9月7日のことであった。ゲーテはイタリアでの体験を》喜んで、情熱的な追憶にふけりながら《語った、とシラーはこの時の様子をケルナーに報告している<sup>(2)</sup>。しかし、ゲーテの言葉に耳を傾けながら、この時シラーは敏感に自分とゲーテとの資質の相違というものも感じとったことを同じケルナー宛ての手紙に書いている。それに、シラーはゲーテにとっては意味をなさない人物の如くにしか扱われなかった。新しい境地に大きな一歩を踏み入れたゲーテと、これから先何をどのようにして自分の歩みを方向づけていけばよいのかまだ模索中のシラー。ゲーテとのこの出会いはシラーにとっては余りにも自分の未熟さを思い知らされただけの気持を残したものとなった。シラーはその後ケルナーに宛てた手紙に於いて、或いはシャルロッテ、カロリーネ姉妹に宛てた手紙に於いて、ゲーテに対する嫌悪の言葉を、或いはゲーテに関して無関心を装った言葉を書き続けたりなどする。ゲーテに対するこうした屈折した感情を抱いたままの一方で、彼は、先に述べたように、先ず何よりも自己の素養を磨くため

に、歴史を研究したり、古代ギリシア文学を研究したりの日々を送るのである。

ところで、しかし、此処にゲーテに対するシラーの関係を考える上にも我々にとって興味深い問題がある。1788年にカール・フィリップ・モーリッツが『美の造形的模倣について』という論文を発表したのである。この論文はゲーテも『イタリア紀行』の巻末に載せ、そこに述べているように、イタリアでのゲーテとモーリッツとの対話の中から生まれてきたものだった<sup>(3)</sup>。これはワイマールでかなり評判となったらしい。シラーも早速それを読んでいる。シラーはモーリッツのゲーテ崇拝に対しては嫌悪を隠さないけれども、彼の思想、この論文には感激し、ケルナーにも一読を薦めている<sup>(4)</sup>。——モーリッツが此処で述べている中心的な問題は、芸術作品を、自然が一つの大きな有機体であるのに比して、小規模の自然と見る、つまり、一つの全的な有機体として捉える、というものであるが、モーリッツは、こうした視点の帰結として、此処で芸術美の問題を全くその自足性という点に見出ししているのである。ヴィーゼはモーリッツのこの『美の造形的模倣について』という論文がシラーにとって、ゲーテへの橋渡しの役として与えた影響を大きく評価している<sup>(5)</sup>。

シラーが以前演劇についての二つの講演によって自己の所信を述べたことは前にも触れたが、そこでの彼の論は、演劇による大衆の道徳的な教化といった有用性の観点からのもの、作用の視点のものだった。演劇——つまり、芸術そのものに対しては常に何かしら手段としての役割しか与えられていなかった。芸術それ自身の独自の価値、存在意義といった問題は全く視野に置かれていなかった。ところが、そのシラーがケルナーに宛てた手紙の中に次のように書いている個所がある。

『私はどんな芸術作品もただ己れ自身に、すなわち己れ自身の美の規則にのみ弁明を与えればよくて、他には如何なる要請のもとにもない、ということを確認しています<sup>(6)</sup>。』演劇についてその社会的使命といったことを強調していたシラー、そして、作者としての立場からの主張とは裏腹に、単なる退屈しのぎのために、或いは俳優の噂話の種にでもする位の気持ちでしか劇場にやって来な

い大衆に対する慨嘆を述べていたシラー。芸術についての主張から道徳上の問題を切り離して述べることの出来なかったあのシラーがこのように書いているのである。これだけを読むと全く同一人物による主張かどうか疑わしくなる程である。この手紙の日付けは1788年12月25日となっている。我々は、こうした時期的なことを考えに入れて、シラーのこうした主張の変化をモーリッツの影響によるものと考えてよいだろうか。ヴィーゼはこのケルナー宛ての手紙についてはモーリッツと関係づけた言及はしていない。それでも、我々がそのように推測することにも一面の妥当性は存するだろう。ただ、それだけで片付けてしまうのも余りに話しの付節が合いすぎる。今挙げたケルナー宛ての手紙には更に先がある。シラーは次のように但し書きをすることを忘れてはいなかった。

》これに反して、私は又、それ（＝芸術作品）はこうした道を通じて全ての他の要請をも間接的に満足させるに違いない、ということも固く信じています。<sup>(8)</sup>《

この手紙のことを考える上では、背景に触れなければならない。つまり、シラー自身この手紙の中で述べているように、彼の詩《ギリシアの神々》（初稿、1788年）に対してシュトールベルクが、その内容が無神論的、非道徳的との非難をしたのがきっかけとなっているのであって、そうした攻撃に対してシラーとしては何とか弁明をせざるを得ない立場からこのような形での反論をしているわけなのである。彼にとってはシュトールベルクの攻撃は予想だにできなかったものだったのであろう。何故ならば、芸術と道徳との結びつきを強調することはあっても、それらを切り離して考えることなど出来なかったのはまさにシラー自身だったのだから。シラーがビュルガーに対して道徳上の問題から激しい批判をするのは直ぐこの後のことであるし、1792年に《新タリーア》誌上に発表した《悲劇的題材による快樂の原因について》という論文に於いてもなお、《快樂を芸術の真の目的として完全に獲得するためには、道徳性という道を通じて行かざるを得ない》<sup>(9)</sup>と述べているのである。先のケルナー宛ての手紙でも、それ故、彼の反論は決して真正面からのものではなくて、あのような但し

書きがついたのである。

しかし、いずれにしても、《ギリシアの神々》についてのシュトールベルクの攻撃に対してなしたシラーの弁明が、彼自身にとって一つの転回点を与えるものとなったことは確かである。そして、それとの連関の中で、モーリッツの芸術美の自足性の主張が彼にとって新しい地平を切り拓く上で一つの支えとなった、というように我々は位置づけることが出来るだろう。

芸術の意義についてのシラーの視点は確かに今後変化していく。以前のように何らかの目的と結びつけて芸術の果たす役割を弁明したりするのではなくて、むしろそうした手段としての視点を捨て、逆に、あらゆる有用性の議論から切り離れたところにこそ真に芸術が人間にとって存在意義のあるものとして主張せられるようになる。芸術の意義が自己目的的なものとせられるのである。ただ、しかし、それでもこうした変化は決して一方から他方への択一的な変化といったものではなかった。つまり、シラーの問題意識の根底に於いては、芸術の問題からその社会的、道徳的な意義といった視点は決して分離せられてしまうことは出来ないのである。

このことを理解するためには、我々は彼の他方面での問題意識のことに目を振り向けなければならない。彼が歴史の問題の中から新たな解決の道を追求せざるを得なくなった《自由》の問題についてである。以前のようにオプティミスティックな二元論に安んじないとするならば、人間は己が倫理性の根拠をどこに求めることが出来るのだろうか。超越的な領域にしか由来しないような倫理性を現実世界での Dasein に持ち込むことは出来ない。しかし、その現実世界での Dasein は移ろい易く、不断の変転に晒されている。人間の《自由》は偶然に翻弄されている。シラーにとってはまさにこの人間の現実世界での生にとって何か一つの不変的な、持続的な価値として妥当するものが必要だった。こうした問題意識の中で彼にとって、《古代と美の世界》が一つの代表的な意義を<sup>(10)</sup> 獲ち得るものとなったのである。更に《自由》の問題は歴史世界の中で解決されることは恐らく不可能であろう。しかし、芸術をその自足性という視点で、あらゆる目的から引き離して眺めるならば、人間はそこに於いてのみ

自由な状態に身を置くことが可能である。——シラーの自由についての考えそのものが、確かにゲーテが後にうまく言い表したように、<sup>(11)</sup> 変っていった。『群盗』を代表とするカール学院時代の彼の作品では、人間の欲求を押しつぶそうとする外的な圧力に対して、それを打ち破り、異質な力と闘い己が自由を実現しようとする努力にこそ彼の共感に向けられていた。しかし、そうした自由が、実際には、はからずも他者に対して暴力的な力と化してしまうという事実の存すること、これがシラーが歴史に目を向けた時に得た認識だった。<sup>(12)</sup> 彼にとって人間が自由を実現するために真に闘わなければならない相手は己れ自身の内面となる。

——此処に我々が見てきたことは勿論シラーが今後辿っていく歩みをも含めた少し先取りしたものである。しかし、それはとにかく、シラーにとって芸術の意義が自己目的的なものとなっていくこと、これは、先に触れたように、シュトールベルクの攻撃に対する弁明から出て来た側面（消極的理由）を持つと同時に、又、それ以上に彼の内面の問題意識（積極的理由）とも密接な関わりを持っていただということをお我々は此処に確認しておきたかったのである。

さて、我々は前回『ビュルガーの詩について』の論に於いてシラーが一体どのような芸術を理想として掲げようとしているのかを明らかにするつもりであった。ただ、その前にこうした論の背後に存する彼の問題意識について触れるために、少し回り道をした。話しを元に戻して、『ビュルガーの詩について』での論を今少し詳しく追っていくことにしよう。

此処でのシラーの詩人に対する要求は、詩作に先立って何よりも先ずは己が個性を『世間』に対して、後世に対して提示せられるに値するもの<sup>(13)</sup> にならなければならない、というものだった。——『理想化 (Idealisierung)、高貴化 (Veredelung)』の要求である。こうしたシラーの要求はやはりまだ芸術独自の問題の中に道徳的な問題を持ち込んでしまったと言わざるを得ないものになっている。先のシュトールベルクの非難に対する反論の時とは違って変わったように、彼の主張はきわめてリゴリスティッシュな響きを持って述べられる。ビュ

ルガーをして、このような批判を書いた者は、《芸術家ではなくて、形而上学者<sup>(14)</sup>だ》と反駁せしめた程である。ケーテ・ハンブルガーも、ビュルガーに対するシラーの論の不当性をこまかに挙げ、詩の問題を論ずるにあたって《創作心理上の価値尺度のみならず、倫理的な価値尺度》をも持ち出していることを批判している。<sup>(15)</sup>しかし、シラーの主張に対するこうした批判について検討する前に、もう少しシラーの述べていることを見ておこう。シラーは《理想化、高貴化》については次のような説明をおこなっている。

《詩人の第一の要請の一つは理想化、高貴化であり、それがなくては彼は名を得るには値しなくなる。彼にとっては、対象（形姿であれ、感情であれ、行為であれ、彼の内に宿っているものであれ、彼の外に宿っているものであれ）の卓越せる点をもっと粗野な、少なくとも異質な混合から解放すること、幾多の対象の中にばらまかれている完全性の諸光線を唯一のものの中に集めること、個々の均斉を妨げる特徴を全体の調和の支配下に置くこと、個的なもの、地域的なものを普遍的なものへと高めることが彼の義務である。》<sup>(16)</sup>

この個所の主張を見る限り、此処で問題とされていることは単に創作技法上のことだと考えられるのであるけれども、しかし、シラーは問題をこの側面だけに限定せず、詩人そのものの人格、個性の問題についても、これと不可分な問題として言及するのである。或いは、一層正確に述べるならば、こうした《理想化、高貴化》の言葉のもとに提示しようとしている事柄を表現上、描写上の問題として明確化しようと試みることに重点を置くより、むしろ、此処でのシラーは作者の内面的なところにこの問題の解決を求めているのである。そしてその場合、今見た引用文の最後に使われていた《普遍》という概念、これが色々な形で使われる。シラーに於いて、《理想化、高貴化》の要求というのは、《普遍的なもの》への要求というのと同じ意味をなして使われる。この概念が詩人の描く対象に対する要求に使われているのと同時に、他方では、詩人の個性に対してもそれと同じ要求がなされるのである。《普遍性》という概念は彼のあらゆる主張の根底に存する中心的な核をなしているわけである。しかし、それが詩人の個性に対する要求に於いて述べられるということは、必然的

に詩人に対して非個性化が要求せられていることになる。シラーに対する批判が最も集中する点は此处である。ビュルガー自身による反論も勿論このことを鋭く捉えている。<sup>(17)</sup>

他方、更にハンブルガーはこの概念の曖昧さを指摘する。つまり、シラーが人間の「普遍的な」性格と言う場合、一方で彼はそれを「全ての人々」<sup>(18)</sup>という意味と結びつけている、即ち、それによって、あらゆる制約を取り払った、「各々の人間個人が人間として関与するところの試石たる普遍人間的なもの」<sup>(19)</sup>を意味しているのに対し、他方では、しかしこれの意味はきわめて倫理的な要求と結びついたもので、従って、そこに制約、限定化をなしている、という批判である。<sup>(20)</sup>

さて、こうした批判に対してシラーのために何らかの形で弁明をなす余地が存するだろうか。——シラー自身、此处では、芸術の問題を論ずるにあたって、まだ余りにも外在的な問題によって焦点を曖昧にしていることは否定し得ない。

シラーがカント美学と真剣に取り組むのはこの後のことである。ゲーテの思想とじかに触れるようになるのは更にその先である。しかし、モーリッツを橋渡しとして、イタリアでゲーテが得てきたものに、間接的にはあるけれども、シラーは既に触れた。「ビュルガーの詩について」の批判の中にも既にそうしたシラーの今後歩む道筋がもう出来あがっている。シラーのこの小論は、従って、そうした意味で彼の後の思想の萌芽として積極的に評価されるべき側面を有することは否定出来ない。と同時に、しかしまさに此处で、シラーがそうした新しい方向づけのもとに思索を進めていこうとしている時に、今また芸術と道德の問題を持ち出しているのである。このことを考えることは決して今後のシラーの思想展開を理解する上で無意味ではないだろう。と言うよりも、筆者には、むしろこのことの問いかけの方がより重要なことと思われるのである。

ハンブルガーはこのシラーの小論「ビュルガーの詩について」に於ける問題を可成り具体的、詳細に分析、批判しているけれども、筆者が不思議に思うのは、「民衆詩人」、或いは「大衆性」の問題に関しては、ビュルガーとの関係で



シラーが付随的に言及したに過ぎないことである、としてきわめてあっさり<sup>(21)</sup>と切り捨ててしまっていることである。しかし、筆者は、むしろこの問題の方こそシラーにとっては重要な、自己の内面の問題意識との関わりの中から生じてきているものだと思う。この問題を切り捨ててしまつてはシラーの主張は殆んど動機付けを失ってしまい、意味がなくなってしまうと思うのである。

シラーは『民衆詩人』という言葉のもとに、時代的な区別と、質的な区別との二様の区別をした。古代ギリシア世界や、或いは吟遊詩人が活躍した昔の世界にあって可能だったような『民衆詩人』の存在は今日の我々の世界には求め得べからざるものだと彼は主張し、その理由として社会の発展に伴う分業化、専門化によって生じた我々の内なる断層と、相互的な断層を挙げ、真にそうした断層を埋めることこそ今日の『民衆詩人』の最も理想とするところで、それだけにそれは最も困難なことだ、というのが彼の主張の内容だった。

社会がまだ分化していない古代世界に於いてならば、人間は個的であると同時に、全的であることが可能だった。しかし、今日の我々は、先ず全的人間性よりも先に個的役割が社会が要求される。断片であることが社会から強制されている、という歴史的な状況にある。こうした状況のもとにある詩人が、その個的な感情をただそのままに表出したところで芸術にはなり得ない、とシラーは主張するのである。単なる経験による事実性それだけではもはや芸術の対象に値いしない。芸術の対象にはそれにふさわしい真実性への昇華がなされなくてはならない、と。ハンブルガーの批判も芸術の対象<sub>対象</sub>に関してのシラーのこうした考察に対しては異論なく承認しているようである。

しかし、問題はその先である。シラーは対象に対するこの主張をそっくり道徳上の問題に置き換える。従つて、例えば、感情の問題に関して、シラーの主張は次のように述べられる。

「……感情を高められた色彩で描くというだけでは不十分である。人は高められた感情を持たなければならないのである。」<sup>(22)</sup>

シラーの要求がこのように対象独自の問題を離れて、詩人の個性にまで向けられるが故に、逆に、批判の総攻撃を受けることになる。ビュルガーにとって

は、シラーのこうした主張はわけの判らぬ抽象論としか思われぬ。シラーが「普遍性」という概念で説明を試みようとしても、先のハンブルガーの指摘のように、問題は却って一層曖昧なところに陥っていく。ただ一つはっきりしていることは、シラーがこうした説明の中で倫理的な要求を堅持しているということばかりである。しかし、此処には、単にシラーの論法が問題の焦点を逸しているという批判だけでは片付けられない問題が存している。問題の所在を明確にしよう。

——シラーにとって、そもそも詩的（或いは芸術の）対象というのは如何なるものだったのか？作家と対象の関係を彼はどのように捉えているのか？

ビュルガーの詩について、シラー自身はこのように指摘する。即ち、それは、「理想的な純粋さと完成度——これのみがよき趣味を満足させるのである——が欠けている場合、人々がやむなくその成立と使命にそれを許すところの詩<sup>(23)</sup>」である、と。シラーはそれを「機会詩 (Gelegenheitsgedicht)」と呼ぶ。このシラーの言葉からも既に明らかに読み取ることが出来るように、芸術的な完成度の問題以前に、シラーは経験的なもの、体験的なものに芸術の対象としての価値を見い出していないのである。逆に、シラー自身の詩に関しては、既に繰り返して、それらが所謂「体験詩」というものと無縁であったことが指摘されてきた。恐らくそれを最も明確にしたのはシュタイガーであろう。「詩学の根本概念」に於いてシュタイガーが抒情詩の本質規定のためになした「透入 (Erinnerung)」という概念は、「主体と客体のあいだの距離の欠如」を、「抒情的な相互滲透状態<sup>(24)</sup>」を意味する。しかし、シラーにはまさにこれが、「情調に己が身を委ねてしまうこと」が、或いは内面と外とを己が歓喜、或いは己が苦痛に混同してしまい、唯一の瞬間の中に没入してしまうこと<sup>(25)</sup>が拒まれていた (verwehrt) ことが特徴なのである、と。「それは彼にとっては単に異質なままだったばかりではなくて、厳密な受け取り方をすれば、彼にとっては攻撃すべきものだと思われるのである。<sup>(26)</sup>」

シラーの対象とのこうした関係は、カント美学研究の中から生じてきたイエーナ大学での講義をもとにした小論「種々様々な美学的対象に関しての諸考

察《（1793年）に於いて次のように述べられる。

》あらゆる対象の表象に際して、従って又、偉大なるものの表象に際しても、心情は決して単に規定せられるものではなくて、常に同時に規定者でもある。成程、私を変化せしめるものは対象であるけれども、しかし、対象を対象ならしめ、従って、その生産行為によって己れ自身を変化せしめるのは表象主体である自我（Ich）なのである。<sup>(27)</sup>《

こうしたシラーの説明を読みながら、我々は勿論カント哲学との関係を考えようとするだろう。しかし、カントが《純粹理性批判》に於いて厳密な論理展開のもとに明らかにした現象としての対象の認識についての問題と、シラーが問題にしようとしていることとの間にはどこかずれがある。一見、感性的直観のア・プリオリーな形式のこと、先験的統覚の問題と関わるものであるかのような気がするけれども、しかし、シラーの場合自我（Ich）という言葉がきわめて個別者の色彩を帯びたものとなっていることに我々は気が付く。シュタイガーはこのようにカント哲学がシラーに於いてはきわめてシラー的な受容をされたことによって生ずる相違を指摘する。カントに於ける先験的な謂での主体はシラーの場合には個別的なものと混同せられてしまっているのである。<sup>(28)</sup>従って、この場合認識についての先験的なそのメカニズムの考察が問題となっているのではなくて、シラーとしては、個々の認識に於ける主体の——単なる感情の場合に於ける受動性ととの対比に於ける——能動性を、又、そのことによって確証される自我の優位性を主張したいのである。このことは《人間の美的教育について》の第25書翰に於いて更に一層明確に次のように述べられている。

》人間が自然を唯だ感受だけしておる間は、人間は自然の一個の奴隷である。その奴隷から出て、人間は自然を思考するや否や、自然の立法者となる。前には唯だ力として人間を支配しておったそれが、今や対象として彼の審判する眼光の前に立つ。彼にとって対象であるものは、彼に対して何の強力をも持たない。なぜならば対象であるためには、それの方が彼の威力を蒙らねばならないからである。<sup>(29)</sup>《

》ビュルガーの詩について《での彼の主張も、こうした彼の思想背景を念頭

に入れた上で振り返って見れば、新たな理解のもとに捉え直すことが可能だろう。

シラーによれば、対象は表象主体である自我を抜きにしては成立しない。主体のこうした関与を抜きにした対象の存在——即ち、表象として現われる以前の対象というが如きものはシラーにとっては幻想にしか過ぎない。シラー自身は体験的なものを創作の素材とすることは殆んどなかったけれども、しかし、経験とか体験をシラーが全く否定してしまっていると考えるべきではない。ただ、シラーにとってはそうしたものは飽く迄創作前の素材を意味するものに過ぎない。他方、芸術の「対象」と言う場合は、彼の論からすれば、既にそれをそのようなものとして捉えたという主体の濾過を経たものを意味するわけである。——我々は、先のようにカント哲学との関係を考えるより、むしろ此处ではシラーが好んで歴史に関わっていたことを想起した方がよいかも知れない。つまり、歴史というあらゆる主観性を排した客観的事実を明らかにしようとするこの分野に於ける程、「対象」が歴史家の把握に委ねられている、という意味で明確な対照をなすものはないからである。我々は単なる歴史的事項の羅列を歴史と呼んだりはしないのである。——いずれにしても、従って、「対象」との関係と言う場合、既にそうした関係を取り結んでいるということ自体が主体の意識の反映なのであり、それ故、シラーがなす道徳的な要求というものも、こうした「対象」との関係に向けられていると考えるならば、必ずしも抽象論として片付けてしまうことが妥当ではない。それに、このように見えてくると、芸術の問題が、たとえシラーに於いて以前と観方を異なえ、その自立的な価値といったものに着眼し、芸術独自の内在的な問題を視座に据えるようになったとしても、創作主体としての作家の問題を経由することなしには決して語り得ないものだったことも我々にはそれなりに理解可能となる。

さて、しかし、芸術についてのシラーのこうした主張は、シュタイガーが「抒情的なるもの」のためになした説明とは如何なる意味に於いても触れ合うものを感じさせない。シラーが対象について「理想化・高貴化」の言葉のもとになしている要求は既に見たが、シラーはこの要求を作家に対して更に別の言

葉をもって説明する。それは 》距離 (Ferne)《 という言葉である。シュタイガーとは全く逆の立場が主張せられるのである。<sup>(30)</sup>

》人がよく愛とか、友情等々が詩人自身にとってさえ筆を運ばしめる機縁となったのだと言う詩に於いてさえ、詩人は自分自身に対して異質となり、己が感激の対象を己が個性から解き、己が情熱をもっと柔らかにする距離から観照する、ということから始めねばならなかったのである。理想美は全く精神の自由によってのみ、自己活動によって、可能となるのであり、それが情熱の凌駕を止揚するのである。<sup>(31)</sup>《

と、このようにシラーは述べている。——思わず識らず口をついて詩が生まれてくるなどといったことは、シラーからすれば、余りにも素材的(stoffartig)なもの、感性的なものに圧倒されてしまっている、ということになる。こうしたシラーの言葉の中に、既に、シュタイガーがシラーの特徴として指摘したことが言い尽くされているように思われる。即ち、シラーにとってそもそもこの現実世界が異郷としてしか感じられなかったことと、他方、その裏返しとして自我 (Ich, Selbst) の感情が強烈なことである。

このようにシラーにとっての対象の問題を追っていくと、根源的なところに迄行きついてしまう。しかも、シラーの問題意識に於いてそれが倫理的なものと非常に密接に絡みあっていることは我々が見てきた通りである。本稿(2)の最初に筆者が触れたように、シラーにとっては、むしろ逆に、道徳的な問題の解決を求める上で芸術の自由の問題が重要な関心事となっていったと述べた方が事情はより正確に捉えられるのである。

しかし、シラーがどんなに芸術の意義についての哲学的な思索を深めたとしても、実際の創作上の問題は又これとは別である。それ故、他方でシラーの関心は専ら彼が一つの理想の具現と考える古代ギリシア文学を範として、その創造の秘密を明らかにすることに向けられたのである。このシラーの努力は、古代ギリシア文学の作品のドイツ語への翻訳という実践的な形でなされた。そして、その過程の中で、彼にとって歴史的な問題に対する省察が不可避のものとして意識化されていくのである。単に道徳上の問題からのアプローチだけで芸

術の問題が説明し得るものでないことは自明であるし、殊に又、彼の直線的な進歩の歴史観からすれば、古代ギリシア文化の理想性が論じ得ないものとなってしまうからである。それ故、彼は古代ギリシア文化を歴史的な発展上未分化な段階での極限のものであったとして、それはそれなりに理想の状態であったことに対する認識を深めていく一方で、それと対比的に近代人の置かれた情況に対しての批判的な視点を明確化していったのである。この場合彼にとって最も重要な問題となったのが一つにはトタリテート（全体性）の問題であり、今一つには普遍性の問題なのである。この倫理的、歴史的視点の問題が芸術の思索に於いても中心的な問題となり、又、それが単に対象の問題としてのみならず、作家の個性、人格の問題としても、つまり、二重の視座の中で捉えられていたわけである。これらについては既に述べたし、又、その意義についても明らかにしたので、此処ではこれ以上繰り返さない。ただ、シラーの芸術に関する諸々の思索がまさにこうした問題意識から促され、展開していったものであることを考えれば、我々としては、たとえ彼が形式の問題を独自の視点の中で捉え、論じている場合でも、だからと言って他方での問題意識との結びつきを全く断ってしまって考えることは出来ないし、又、そうしたやり方は決して正当でもないことを筆者は繰り返さずにはいられない。

シラーが作家として、古代ギリシア文学との関わりの中から創作上自己に最も重要な課題として取り出してくるのは、》Simplizität（素朴さ）《 というものである。》ビュルガーの詩について《に於いて、シラーはそこでの自己の主張、要求を》解決する秘密のすべては——素材の幸福な選択とその扱いの極度の素朴さである《<sup>(32)</sup>、ときわめて簡潔に此処に我々が見てきた問題に対する一つの解答を与えている。このシラーの言葉は既に文学に於ける象徴の問題の核心に触れるところにまで来ているものだと言うことが出来る。しかし、その具体的な説明に於いて、問題の本質的な点が深められる前に、むしろ関心という意味からは、倫理的、歴史的な問題が前面に出たために——他方では、成程それが彼の芸術についての哲学的な思索を深めていったわけであるけれど、しかし——時として、問題を逸脱してまでのビュルガーに対する個人攻撃的色彩のもの

なってしまっていたのである。それ故、逆に、この『ビュルガーの詩について』という小論でシラーが主張しようとしていることも結局資質を異にするビュルガーという詩人に対する不当な、見当違いの非難という側面ばかりが強調されることによって、シラーが、むしろもっと根本的なところで、自己の内面的な問題と対峙する中から新たな理想を模索していったその過程での彼のリゴリズムが却ってマイナス的にしか評価されなくなってしまっているのである。

シラーは芸術家として、人間として自分を取り巻く世界、近代という時代状況に無関心ではいられなかった。その意識故に彼の芸術についての思索はなされていった。『Simplizität』の問題も、最初は『書く』ということに対しての自己批判、反省の中から彼が自からに新たな課題としたものであったけれども<sup>(33)</sup>、更に深い批判的省察を経て、周知のように、彼の芸術論での重要な概念となっていったのである。我々が此処に見てきた『ビュルガーの詩について』に於いては、それが芸術の問題を逸脱している、と人々によって批判されるまさにその理由の故に、最も鮮明にこうした彼の問題意識を顕したものとなっている。近代というこの時代の中ではもはや不可能となってしまった『民衆詩人』の存在、古代ギリシアの詩人たちや、吟遊詩人たちにとっては特別なことではなかった『大衆性』、それを我々がこの近代という時代の中で真の意味で、つまり『最も困難な形』で獲得するためにはどうすべきか、という自問に対してシラーは先の答えを出したのである。

様式、とか形式の問題はその非時間的な性格の上から歴史的視座を欠落したところで述べられることが通常である。ジャンルを問題にするとなると殊にそうである。ハンプルガーの批判は彼女自身による『抒情詩』についての固定的な見解を前提として、又、そのジャンルの視点という枠の中で論じられているが故に『ビュルガーの詩について』でのシラーの問題意識にまでは言及しようとしていない。シラーは、しかし、此処で『抒情詩』というジャンルの批判を行っているわけではない。むしろ此処で重要なのは、彼が芸術の問題を論ずるにあたって、それを通時的な視座の中でなしていることなのである。

シラーは ≪Simplizität≫ の問題を後に更に明確に 歴史的カテゴリーのもとに分類し、≪素朴文学≫ に対して、我々の文学を ≪感傷文学≫ と呼んだ。≪ビュルガーの詩について≫ に於ける ≪大衆性≫ の問題、 ≪Simplizität≫ の問題は、従って、そうした後の思想展開を踏まえて、我々としては ≪素朴文学≫ へと到るプロセスとしての ≪感傷文学≫ の問題が既にこうしたきわめて鮮烈な自己意識のもとに述べ表されているものと考えられるのであって、それ故、この問題は決して付随的に出て来たものなどとは言えないのである。 (続く)

#### 参考文献

(既出のものを除く)

- (1) Friedrich Schiller, *Sämtliche Werke in 20 Bdn.*, dtv-Gesamtausgabe, Bd. 5, 17, 18.
- (2) Hamburger, Käte : ≪Schiller und die Lyrik≫, in : *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft*, Bd. 16, 1972.
- (3) Mayer, Hans : ≪Schillers Gedichte und die Traditionen deutscher Lyrik≫, in : *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft*, Bd. 4, 1960.
- (4) ≪人間の美的教育について≫ 新関良三訳, ≪世界大思想全集, 哲学・文芸思想篇 22≫ 河出書房
- (5) ゲーテ著, ≪イタリア紀行≫, 相良守峯訳, 岩波文庫
- (6) エッカーマン著, ≪ゲーテとの対話≫, 山下肇訳, 岩波文庫
- (7) エーミール・シュタイガー著, ≪詩学の根本概念≫, 高橋英夫訳, 法政大学出版局

#### 註

- (1) ゲーテがこの時コホベルクのシャルロッテ・フォン・シュタイン夫人の別荘を訪れていたのである。
- (2) 1788年9月12日付けの手紙。(≪Friedrich Schiller, Briefe≫, S. 175)
- (3) ≪イタリア紀行≫ (下), 248頁参照。——当時モーリッツはゲーテの客としてワイマールを訪れていた。ところで、ゲーテとモーリッツはローマで知己となったが、シラーは個人的には既にライプチヒ時代にモーリッツと識り合っている。
- (4) 1789年2月2日付けの手紙を参照。
- (5) Wiese, a. a. O., S. 398 ff.
- (6) 1788年12月15日付け。(≪Friedrich Schiller, Briefe≫, S. 187 f.)
- (7) Wilpert によればシラーは1789年1月にモーリッツの論文を読んでいる。(Wilpert, a. a. O., S. 121)
- (8) a. a. O., S. 188.



- (9) dtv-Gesamtausgabe, Bd. 17, S. 129.
- (10) Wiese, a. a. O., S. 398.
- (11) エッカーマン著 >ゲーテとの対話<(上), 1827年1月18日, 275頁。(「シラーのすべての作品には……自由の理念が一貫して流れている。そしてこの理念は、シラーが教養をたかめ、以前の彼自身とは別人のように変るにつれ、ちがった姿をとるようになった。彼を苦しめ、詩作に影響したのは、青年時代では自然的自由であり、後年には精神的な自由であった」山下肇訳)
- (12) これが彼の劇作にも影響を与えないではいられなかったことが、特に、彼がドン・カルロス<に対して自から長い分析批判をした >Briefe über Don Carlos< から識られる。(dtv-Gesamtausgabe, Bd. 5)
- (13) >Über Bürgers Gedichte<, Nationalausgabe, Bd. 22, S. 246.
- (14) Die >vorläufige Antikritik und Anzeige< Bürgers, ebda, S. 420.
- (15) Hamburger : >Schiller und die Lyrik<, S. 305.
- (16) a. a. O., S. 253.
- (17) a. a. O., S. 419 f.
- (18) >Verteidigung des Rezensenten gegen obige Antikritik<, Nationalausgabe, Bd. 22, S. 260.
- (19) Hamburger, a. a. O., S. 318 f. 又, S. 309 ff. も参照。
- (20) ebda. S. 318 f,
- (21) ebda. S. 302.
- (22) a. a. O., S. 246.
- (23) ebda. S. 257.
- (24) シュタイガー著 >詩学の根本概念<, 85頁。
- (25) Staiger : >Friedrich Schiller<, S. 96.
- (26) ebda.
- (27) dtv-Gesamtausgabe, Bd. 18. S. 124.
- (28) Staiger, a. a. O., S. 178.
- (29) >人間の美的教育について<, 205頁。
- (30) 確かに、これはもはや立場の問題というところに行きつくほかない。それ故にこそ、シラーが自己の理想とする文学を追究する上で、ビュルガーという自分とは全く資質を異にする詩人を批判の俎上に載せたことに対する不当性がこれ迄繰り返し非難されてきた。しかし、逆に、同じ様に、>抒情詩<の問題を所謂 >体験文学<の枠内に限ったところでしか捉えない中でシラーの主張を論難することも、ハンス・マイヤーが >シラーの詩とドイツ抒情詩の伝統<に於いて述べているように、議論としては結局は不毛なものにしかならない。
- (31) a. a. O., S. 256.
- (32) ebda. S. 248.
- (33) 1788年8月20日付けのケルナー宛ての手紙を参照。